

# 鈴木大の情報探索活動

——ポサドニック号事件を事例に——

松平智史

## はじめに

文久元（1861）年2月、ロシア軍艦ポサドニック号が、船体修理を理由として対馬尾浦崎に來航した。ポサドニック号艦長ビリレフは、船体修理に留まらず、兵營施設の建設や対馬の租借、対馬藩主義和との面会などを強要した。これに不満を抱いた現地住民と、乗員との間で小競り合いが生じるまでに事態は発展し、事態解決のために徳川政権は、幕吏を対馬に派遣するなどして退去を要求したが、ロシア軍艦は容易に退去せず、藩主との面会や対馬租借を強要し続けた。押し問答が続く中、徳川政権はイギリスと対談を行い、イギリス軍艦の対馬派遣が決定された。7月にイギリス軍艦エンカウンター号・リンダウ号が対馬に來航、ポサドニック号へ抗議を行い、翌月にポサドニック号は対馬を退去した。

この事件は、來航した軍艦名からポサドニック号事件とも称され、当時の政局のみならず、幕末維新史研究においても注目され<sup>1)</sup>、特に日本の「半植民地化の危機」論に大きな影響を与えた事件であり、本稿で取り上げる「新聞」にも事件に関する記述が見られる。「新聞」とは、後期水戸学のイデオログとしても著名な水戸藩士豊田天功が、江戸の水戸藩邸に在勤した同藩士鈴木大（安之進、保之進とも）に、情報探索活動を命じて収集させた情報を筆写・編集した史料である<sup>2)</sup>。また、「新聞」に関連して、鈴木が水戸に在住した天功に情報を送る前段階に、収集した情報を備忘録として書きとめた『鈴木大日記』<sup>3)</sup>（以下、『日記』）が挙げられる。

水戸は、尊王攘夷論の発信地として、幕末維新期の政局や思想に多大な影響をもたらしたとされる一方で、蘭学をはじめとする、西洋諸国の学問や情報などに高い関心をもつ人々も多くいた。大老井伊直弼が暗殺された桜田門外の変、関東一円を巻き込んで攘夷運動が展開された筑波山拳兵（天狗党の乱）などは、水戸藩士が首謀者となった事件として知られるが、藩内は、過激な攘夷論一色に染まっていたわけではなく、安政5（1858）年8月に生じた「戊午の密勅」返納問題をきっかけに、後の事件の首謀者となっていく過激派（「天狗」、 「激派」）とは袂を分かち、彼らに批判的な立場をとり、全面的ではないが、開港政策を主張する人々もいた<sup>4)</sup>。その中で天功は、「激派」と対立を深めた人々（「柳連」、 「鎮派」）の中核的存在であった会沢安の同僚であり、水戸の蘭学事業の展開を主導した人物でもあった<sup>5)</sup>。天功は、藩校弘道館での蘭学学習などを主張したが、前藩主徳川斉昭によって退けられ、最終的に天功の下で学んでいた藩士が、江戸藩邸で蘭学を学ぶことになった。その時、江戸での蘭学学習の中心にいたのが、天功の息子小太郎と鈴木である。

このように、天功らは西洋諸国に関する情報に強い関心を寄せており、「新聞」の中でもそれは反映されている。彼らが収集した情報は、国内諸勢力の動向のみならず、徳川政権が展開し

た外交に関する情報や、各国代表から老中へ差し出された書簡、更には当時、アメリカ大陸で勃発していた南北戦争に関する情報<sup>6)</sup>など、その種類は豊富であり、その中には先述のボサドニック号事件についてのものも数多く残されている。尊攘派と見られながらも、西洋諸国に関する豊富な知識や情報を有し、過激な攘夷運動には批判的であった彼らが、西洋諸国の「侵略」とも捉えられかねない接近を、どのように見ていたのか。本稿では、「新聞」と『日記』を手がかりに、幕末維新期の政局に大きな影響を与えたボサドニック号事件について、鈴木や天功らが、この事件のどこに重点を置きながら、情報収集を行っていたのか、そして、その情報から、この事件をどのように見ていたのかを、事件の経緯に触れながら検討していきたい。

## 第1章 ポサドニック号の来航

### 第1節 事件前後の動向

西洋諸国は、ボサドニック号事件発生以前から対馬に対して強い関心を抱いていた。安政6(1859)年4月、イギリス軍艦アクテオン号が対馬に来航、対馬藩政に対し食料などの物資を要求した。藩政は要求を受諾し、加えて対馬への上陸は控えるよう要請したが、アクテオン号乗員はそれを無視し、上陸して島内を散策、湾内の測量を行って、20日後に退去したが<sup>7)</sup>、その後、同年11月、アクテオン号は対馬に再来航している<sup>8)</sup>。

一方、ロシアも、安政5年5月に清国と愛暉条約を締結した後に沿海州を領有、その後も勢力拡大を続け、朝鮮半島への進出や対馬に着目するようになった<sup>9)</sup>。そのような中、イギリスの対馬への接近は、ロシアを刺激することになった。万延元(1860)年5月、東洋艦隊司令長官リハチョフは、本国海軍省にイギリスの対馬接近を伝え、これに対し、海軍省総裁コンスタンチンは、外務大臣ゴルチャコフとの意見の相違を経ながらも、対馬占拠に関する指令書を発している<sup>10)</sup>。

このような西洋諸国の対馬への接近や関心は、『日記』にも見られる。文久元年2月28日条には、「通事等之説にハ、イギリス等旧冬対州并箱館等拝借之義申候処、右ハ御許容無之都てロシア方へ拝借仕度趣を以て参り候状之由ニ御座候」<sup>11)</sup>と記されている。通詞が具体的に誰を指すかは不明であるが、鈴木が外交の現場で、西洋諸国代表者との交渉の現場に直に居合わせる人物とのコネクションをもっていたことが理解される。情報の内容は、イギリスからの対馬「拝借」の願い出があり、幕閣がそれを拒否して、ロシアに「拝借」するようであるというものである。このようなロシアを特別視する潮流は、和親条約締結時の外交方針として主張された、いわゆる「ロシア同盟論」に通ずるものでもあり、ロシアになれば、対馬「拝借」を許可するという風潮が、当時の徳川政権内部に存在していたことが推察されるだろう。また、ロシアからの接近もあったことが、『日記』の3月15日条に記されている。

一、ロシア人毎度之通り尽く静、且ツ穩ニてがさつ之事更ニ無之、且ツ云、イギリス等何程種々之事申上候とも御心配ニハ及び不申候杯申候由、依てロシアへハ此後頼み候て実ニ和親いたし不申候てハ不相成事ならん杯申者も有之由ニ候<sup>12)</sup>

このような徳川政権内部の「親露」的な態度と、ロシアの接近があった中、2月3日にボサドニック号が対馬に来航した。はじめは、船体修理を目的とした来航とされたものの、一ヶ月後の3月3日には、ボサドニック号乗員が無断で上陸、材木を伐採後、昼ヶ浦村芋崎に移動して船体修理をすると見せかけて、兵営施設建造を開始した。ロシアの「強引な」対馬滞在について、鈴木は情報を得ており、『日記』4月15日条に記されている。

た、去月中ロシア船対州へ着シ破船修覆之内滞泊候よし申立ニ御座候、然る所此度御役人初メ大勢罷下候義内実ハ余程事と奉存候得共、未タ此と申確説ハ不承候、乍然推考ニハ此度イギリス等存意ニ日本ハ何事ニても兵武を以て押付ケ候得ハ押付キ候事と申事ニ世界一般之評ニ相成候由ニ付、此度英仏等兵を興し対州等を借用之内評有之坎ニて右を開キ付ロシアは先年より右地懇望之事此事四五十年跡と如何可紀ニも有之右ニ付先をかけ参り候事ニも候哉、表向ハ船修覆ニ候得共、内実ハ居住して引去り候様子も無之事坎も難計奉存候後ニ亂し候得ハロシア船最13) 初参り候ハ正月末之様子也

イギリスやフランスは武力をもって対馬を「借用」しようとしており、それを憂慮したロシアが、船体修理を建て前にして、対馬永住を企てていたことが記されている。なお、一つ書きに付記されている「た」について触れておくと、鈴木は『日記』の中で、その日に自身が訪問した人物や、訪ねてきた人物を記しており、このことから、この日鈴木が訪問した仙台藩士玉虫左太夫と推測される。玉虫は、当時目付であった堀利熙に仕え、堀が箱館奉行に就任した後、蝦夷地に赴任した際にも随行しており、万延元年の遣米使節団の一員として渡米を果たした人物でもある<sup>14)</sup>。また、玉虫も鈴木と同様に、文久期から藩命によって、探索活動を開始しており、「官武通紀」<sup>15)</sup>や「波山記事」<sup>16)</sup>を編集しており、奈良勝司氏<sup>17)</sup>が指摘しているように、鈴木は、他藩の藩士と交流を図りながら、探索活動を行っていたことが理解される。このように、鈴木は他藩の藩士や、西洋諸国との交渉に携わった人々とのネットワークを構築・利用しながら、事件に関する詳細な情報を、事件発生前後から収集していたと推察されるだろう。

## 第2節 対馬藩の動揺

ボサドニック号乗員は対馬無断上陸、兵営施設建設といった「侵略」とも受け止められかねない行動を続け、それを更にエスカレートさせていった。3月7日、警備の任に就いていた対馬藩郷士が乗員によって拉致され、対馬藩家老仁位孫一郎と、ビリレフとの対談においては、ビリレフから藩主との直接対談が要求された。4月12日にはボサドニック号の端船が、水路を強引に通過しようとしたことをきっかけに小競り合いが生じて、関守の安五郎が射殺される事件が発生した<sup>18)</sup>。そしてその翌日、乗員が番所を襲撃して対馬役人を拉致し、農家の牛を強奪する事件も発生している<sup>19)</sup>。

こうしたボサドニック号の「暴挙」により、対馬藩政は対応を迫られ、徳川政権の指示を仰ぐために報告書を作成、4月6日に徳川政権から、外国奉行小栗忠順・目付溝口勝如が対馬に派遣され、5月8日に到着した。到着後、小栗らは、対馬藩政と対談を行っており、『日記』では、乗員が横暴を働いている現状に憤慨し、「他家へ対し武道ニ於て恥辱無此上候」であるとして、耐えかねている藩士がいるため、「公辺御決断打払候様」との指示を求める藩執行部と、「一国

計之事ニ無之、天下之一大事故兎ニ角御沙汰相待候様」と宥める小栗らの対談が記されている<sup>20)</sup>。

交渉は小栗らに引き継がれ、改めてビリレフとの交渉が再開された。『日記』6月12日条には、ビリレフが、イギリスは対馬に注目し、奪われては日本だけでなく、ロシアにとっても不都合であり、協力して対馬を防衛したいが、現地の人々は話に応じないと主張している様子が記され<sup>21)</sup>、「新聞」では小栗が到着以降の様子が記され、小栗らとビリレフの対談が次のように記されている。

一、小栗等五月八日対州へ着し候処、ロシヤ人ハ其以前処々測量も仕舞、可然場へ台場を構へ、大砲数十挺相備へ、且陣屋等ハ皆きり組み候て、持参いたし来候様子之由、小栗着いたし候と、ロシヤ人云、此迄対州人何れニも訳ケ不相分込り居候処、好き折御来着、誠ニ大慶仕候との事之由、小栗等より何故ケ様之次第と承候処、ロシヤ人云、魯国ハ大国故、何も此小島を貪り候所存ハ毛頭無之候得共、イギリス人此地を目掛ケ居候処、既ニ此間右国之軍船地中海を出帆いたし候間、追々此島へ到着可相成候、此島イギリス人之手へ渡候而ハ、ロシヤの大害ニ御座候間、是非彼へハ渡し不申候様仕度候、伏而ハ対州人也、何れ之御人数也、日本にて此地を御守り相成候事ニ候ハ、直ニ此大砲等此俣指上候間、何卒イギリス人御渡し無之様仕度候、若又右ニ付イギリスより御国へ対し彼是申、兵端を開き候事ニ候ハ、何れ之地ニても屹とロシヤより軍船指向、防戦いたし候間、右之義ハ決て御掛念被下間敷との事にて、中々引去り候次第ニハ無之候、依而小栗等も無致方罷帰り、其旨言上外無之との事にて、直ニ帰り候由ニ御座候、右ニ付途中より事済之旨申触れ置帰着、直様其旨極密閣老へ申立候由ニ御座候<sup>22)</sup>

詳細をみていくと、何故このような行動に出たのかと小栗が問い質している。これに対し、ビリレフは、ロシアは対馬に関心はないが、イギリスが対馬に目をつけており、イギリスの手に落ちることがないようにするため、大砲を設置したと返答し、対馬退去を拒み続け、最終的に小栗が対馬を離れたという内容である。

このように、『日記』や「新聞」においては、徳川政権から派遣された小栗らと、藩執行部やロシアとの交渉の詳細が記されている。その一方で、対馬藩内で生じた現地住民とポサドニック号乗員との間で生じた小競り合いや、藩政の情勢についての情報は、それに比べて少なく、「対州にて戦闘魯人一旦敗走之説有之候よし」<sup>23)</sup>といったように、具体性に乏しく、短い文言で終わるものも少なくない。鈴木が江戸で探索活動を行っているため、現地対馬における情報が少なくなったとも考えられるが、鈴木に関心事として、その中心が、徳川政権から派遣された幕吏が、対馬藩やロシアとの間で、どのような交渉を展開していくのかにあったとも考えられるのではないだろうか。

## 第2章 イギリスとの交渉

### 第1節 老中安藤信正とイギリスの対談

小栗らの帰還後も、対馬藩とロシア側の押し問答は依然として続き、藩内では移封論が次第

に台頭し始め、藩主義で徳川政権へ移封内願書が提出されていたが<sup>24)</sup>、事件終結へと向かう一つの転機が訪れた。それは、イギリスとの交渉である。

対馬でボサドニック号事件が進展している最中の4月、イギリス特命全権公使オールコックが、前年に発生していたモス事件の訴訟処理を終え、香港から長崎に帰着し、通商条約で定められた国内旅行権に基づいて、陸路による江戸への帰還を計画した。この計画に対し、長崎奉行朝比奈昌寿は、国内情勢が不安定であることを理由に、海路での江戸行きを求めたが、オールコックはそれを聞き容れず、結局、陸路での江戸行きが決定した。このようなオールコックの行動は、尊攘派浪士から目をつけられ、畿内から東海道を通行して江戸へ帰着したことは浪士たちの怒りを招き、更には、オールコックが京都を見物して東海道を下ったという噂<sup>25)</sup>も流れ、オールコックの国内旅行は、攘夷派浪士の感情を刺激することになった。また、鈴木も、「大坂之義オールコック未タ不参候乍然兵庫へ着シ大坂京師巡見其上にて江戸へ参り候つもり故例之諳夷故如何様之事ニ相成候欤も難計候」<sup>26)</sup>とオールコックの京都訪問の噂について記している。

その結果、イギリス仮公使館として利用されていた江戸高輪東禅寺に到着した翌日の5月28日、水戸浪士が、東禅寺を襲撃する第一次東禅寺事件が勃発した<sup>27)</sup>。この事件によって、仮公使館で勤務していた書記官オリファントと、長崎領事モリソンが負傷し、事件に対する責任から、徳川政権は、事態収拾を図るためにオールコックとの交渉を開始し、次第にイギリス寄りの外交姿勢を展開していった。このような第一次東禅寺事件の影響があり、従来の研究においても、イギリスとの交渉は、ボサドニック号事件の解決要因の一つとして注目されてきた<sup>28)</sup>。

では、『日記』や「新聞」では、徳川政権とイギリスの交渉が、どのように取り上げられているのか。『日記』7月12日条に、次のように記されている。

一、十日之応接ハ、此方久世安藤酒井彼方アトミラルとアールコック右之外通弁官のみ残り尽く被為引候間事情更ニ相分り不申候、乍然極密推考之由ニハ、対州之ロシヤを日本と同等学力して扱ひ申し度と之掛合之様子と承り申候<sup>29)</sup>

この会談は秘密会談であったようであり、鈴木も正確な情報を掴み切れていない。しかし、未だ対馬に滞在し続けるロシアを退去させるために、徳川政権とイギリスが協力しようとしていると推測しており、また、7月21日付「新聞」では、「十日之応接之義何れニも秘し、未タ洩れ不申候得共、近日之内何れ之手なり聞き出し可申奉存候」<sup>30)</sup>と、後日正確な事実関係を伝える旨を記しており、鈴木が7月10日の会談内容に高い関心を示したことが理解される。そして、7月26日付「新聞」では、7月10日の会談内容についての諸説を伝えている。

一、英夷応接之義、何れにも分り兼候て、其説数多有之、此間中随分心を用ひ承り候処、何れが真説やら不相分候得共、大意之処ハ、対州之義をロシヤに先をかけられ候義も、いちや々いたし候に無相違被存候、承り候分ハ左ニ得貴意候

一、一説ニ英人ハ東洋水師提督并香港之惣督及びアールコックニ而、例之通り此方一同席へ列し候処、安否等応答相済、英人云、西洋にてハ大事をバ公然と議し候得共、日本にてハ機密として漏れ不申候様被成候よし、成程又外へ彼此と漏れ候ても指支候間、今日ハ御人

払ニ願度と之事にて、一同坐を被為引、御目付残り候処、大事之談判ハ御老中若年寄にて沢山にて、御見張之御役も無益なりとて、御目付も被為引候、依而応接之度毎に次之間にて口書を認め候処、其日之口書ハ、右迄ニ而跡無之候間、世上ニ而何分ニも相分り不申候、乍去対州之魯人を為引候とハ無相違申候事ニ承り申候

一、一説ニ英人云、魯人之対州へ参り候始末、甚暴之いたし方ニ候間、日本之為メ追払ひ候様可仕候、此方云、右ハ追々及掛合候事故、先ツ其内相分り可申候、英人云、夫ハともあれ、右様ロシヤ無法之所業にてハ、世界之公論にて打捨置きかたく候、英国之軍船此度参り候外に広東ニ六艘有之候間、右呼寄、早速追払可申杯申候由ニ候

一、一説ニ安藤英夷之意を迎ひ、対州魯人中々去り不申候間、何卒取計ひ呉候様頼み候由  
右何れも屹といたし候処之説ニ御座候間、兎ニ角薄き坎厚き坎ハ不相分候得共、対州之義ハ無相違有之事と奉存候<sup>31)</sup>

鈴木自身も7月10日の会談内容については、「此間中随分心を用ひ承り候」と、会談内容の詳細を明らかにしようと丹念に探索活動を行ったことを窺わせる。しかし、情報が錯綜していたためか、依然として確かな情報を掴むことはできておらず、噂として浮上している諸説を記している。二つ目と三つ目の一つ書きについては、それぞれ、『日記』7月21日条<sup>32)</sup>と、22日条<sup>33)</sup>にはほぼ同文の記事が見られ、その内容は、ポサドニック号を対馬から退去させるために、イギリス軍艦が対馬に向かうという点において共通している。一方で、最後の傍線部一つ書きについては、『日記』からは確認することができず、鈴木がその情報を後から得て、重要と判断して追加したとも考えられるだろう。

この会談によって、イギリス軍艦が対馬へ向かうことが決定したが、8月14日にイギリス東洋艦隊司令長官ホープと、老中安藤信正が再度対談を行っていたようであり、『日記』8月18日条によると、「十四日応接（イギリス人）即ち又々アトミラール参り候之事之由也、右応接大意ハ対州へ参り魯人へ掛合候得ハ旧冬江戸表にて御許借相成候よしニ候、左候てハ、魯之不法ニハ無之と之事にて掛合之よし、尤委細之結末ハ未タ不分候事」<sup>34)</sup>と、確かな情報ではないが、安藤がロシアに対馬の租借を許可していたという説が浮上していたことが分かる。この会談も鈴木の大きな関心事であったと考えられ、改めて詳細な内容を『日記』8月27日条において、次のように記している。

一、去ル十四日応接承り候処左之通り、ホープ云、ロシヤ人へ対馬を御かし被成候趣ニ候所、如何之御次第ニ御座候哉、安藤稍久敷黙し容色を變し、成程内々許容いたし候、ホープ云、右にてハロシヤ人之不法ニハ無之処我々初メ大ニ了簡違いたし候、何故此迄右を御話シ無之候哉、安藤云、話シ候つもり之処何角と取紛れ其内段々延引いたし候、ホープ云、左様にてハ此迄之処ハ無致方候、乍然西洋各国心得方も違ひ候間早速御通達有之可然候、此ノ廿日ニハロンドン迄之飛脚有之候間、夫迄ニ御状御認メ可被成候、ロンドン迄遣し候得ハ、夫より直ニ各国へ通達いたし候事ニ候、廿日を過キ候てハ跡之飛脚ニ相成候間、余り延引故不宣是非廿二日迄ニ御指出相成候様と之申聞候由

また、この一つ書きの上部には、次のような端書きも記されている。

安藤之口上を能承り候得ハ、段々話し合居候処を小栗が弥許し候と申風ニ申候由ニ候<sup>35)</sup>

内容は、ホープが安藤と対談を行い、何故対馬をロシアに租借したのかを問い詰め、安藤が、返答に窮しながら、内々話し合いをして許可したと述べ、ホープから、西洋諸国に対する速やかな通達を要求される、というものである。また、この時点では、ロシアに許可を出したのは小栗であったのではないかとの説が流れており、誰が対馬の租借をロシアに許可したのかという情報は錯綜しており、その真相を鈴木が掴もうと奔走していることが読み取れる。

この会談も「新聞」に記されているが、ここでは『日記』の記述との比較をしてみたい。日付は9月2日。細部まで比較すると、異なる箇所は多く見られるが、その内容は、『日記』で記されているものとはほぼ同じであり、鈴木が探索した情報が、速やかに天功へ届けられていることが推察されるだろう。

一、去ル十四日イギリス応接并右アトミラル、魯西亜アトミラルを追ひあるき候義、追々得貴意候処、十四日応接之義此度不残承り候処、左之通可怪可哭、イギリスアトミラル云対州へ参り候ロシヤ人へ掛合候処、対州之地ハ江戸表ニ而拜借相済候義無相違由、左候而ハ、ロシヤ人之不法ニ無之候得共、如何之次第ニ御座候哉、安藤対州容色を变じ、挨拶不致、稍過きておる／＼ふるへながら、成程内々話有之、許容いたし候、イギリス云、成程左様ニ可有之、然る所、何故此迄御話無之哉、我々始メ大了簡違仕候、安藤云、此迄話し候つもり、遂ニ何<sup>カク</sup>ひ<sup>カク</sup>とれ延引致候、イギリス云、左様にてハ此迄之義無致候、乍去御許容相成候事ニ候上ハ、西洋各国之心得方も違候間、早速各国へ御通達可然候、此廿八日ニハ「ロンドン」迄之飛脚指出候間夫迄ニ御書状御認可被成候、廿日を過キ候てハ、余り延引にて不宜候ロンドンへ遣し候得バ、早速ロンドンより各国へ触れ渡し候事ニ御座候と之事之由ニ御座候

右応接にてハ、幕吏迄も愕然之由ニ伝承仕候、安対一々抜髮、其罪難贖奉存候<sup>36)</sup>

傍線部の箇所は、『日記』には見られない文言である。一つ書き中の傍線部について、この文言自体はなくとも意味は通じるのだが、加えられたことによって、ホープに詰問されて返答に窮する安藤の態度が、『日記』に比べて、より強調されている。これは、一時的に親露的な態度を取り、ロシア一国だけに、内密に対馬の租借を許可したことで、対馬藩政や幕政に混乱を招き、更にはそれをイギリスに詰問されるという、外交上の失敗を犯した安藤への批判の意味が込められているのではないだろうか。そして、最後の傍線部についても、「其罪難贖奉存候」とあり、安藤らの外交政策を批判している。また、『日記』には見られた端書きは、「新聞」では見当たらず、鈴木が後にこの情報を削除したものと考えられる。

ただ、後日になって、鈴木は8月14日の会談内容に関する情報を訂正しており、9月21日付の鈴木「聞込」では、「別紙之通り、去月廿三日表句、ロシヤへ御掛合ニ及候、此文面にてハ、去月十四日応接之趣書取とハ齟齬いたし候得共、此文面と先達得貴意候長崎奉行申出とハ確証<sup>廿九日</sup>

ニ候様被存候得共、十四日応接之書取りニも、亦次第有之状ニ候」<sup>37)</sup>と記されている。ここで記される「別紙」とは、安藤・久世両名がロシア外相ゴルチャコフに宛てた書簡の写しである。その内容は、今回の事件は、ロシア本国の承認を得ないまま、ビリレフか、リハチョフが主導して発生した事件であり、「若コモドール又は船将一人之意に候ハ、一己之私より両国之信義を可失ニ至り以之外事ニ候」であるとし、速やかに両者に対馬から軍艦退去を命じてほしい、というものである。更に、安藤がロシアに対馬租借を内々に約束したという情報に関して、「安藤も確乎として許し候訳ハ勿論有之間敷候」と、情報は誤りであったと内容を訂正しており、先述した小栗が対馬租借をロシアに約束したのではないかという情報の削除も考慮すると、鈴木は、この事件の根本的な原因とも捉えられる、誰が対馬租借をロシア側に言及したのかに関する正確な情報を求めて、探索活動に取り組んでいたことが推察されるだろう。

## 第2節 事件の終結

7月10日に行われた安藤とオールコック・ホープの会談によって、イギリス軍艦の対馬への出向が決定し、7月22日にイギリス軍艦エンカウンター号・リンダウ号が対馬に到着、ホープはビリレフと対談を行い、今回の対馬滞在について抗議している。その対談を「新聞」では、次のように記している。

一、イギリスホープ対州ニテロシヤ人へ応接書付有之由ニテ、昨今承り候処ニテハ、魯人云、小栗豊州申事ニケ様々々、映人云、小栗豊州と申人ハ如何様之役状、夫ハ置キ、此方ニテハ不残条約を本ニいたし候、然る所、此方より条約を破り始メ候てハ、日本ニテハロシヤ計とハ不存、万国一体と見込候事故、申せハ我々迄之顔よごしと申者也と申事ニテ、責候由ニ御座候<sup>38)</sup>

ビリレフは、小栗が言及したと釈明するが、ホープは次のように述べた。小栗という人物が許可したといったにせよ、西洋諸国は条約に基づいて行動しており、こちらから条約違反をしてしまつては、日本は、今回の違反行動をロシアだけのものとは考えないだろう。西洋諸国全体の習性を受け止め、不信感を募らせるようになると思われ、そうなれば、我々イギリスにとっては不名誉なことである。彼はこのようにビリレフを詰問することで、ロシア側が速やかにボサドニック号を退去させるよう、圧力を加えたのである。

このようなイギリスの抗議に加えて、先行研究でも指摘されているように、事件の解決を後押しした要因として、6月に、徳川政権の命を受けた箱館奉行村垣範正らが、在箱館ロシア領事ゴシケヴィッチと交渉を行っていたことが挙げられる。その交渉についても、「新聞」では、「対州在留仕候魯船之義ニ付、六月比箱館在留之魯国コンシユルへ早速引取可申段御掛合御座候処、其節ハ国元へ可申送段御答仕候のミニ御座候、其後本国へ右コンシユルより早速申送候様子ニテ、水師提督書簡相送、対州在留之魯船八月廿三日に退帆仕候段御届有之由ニ候」<sup>39)</sup>と、村垣らとゴシケヴィッチによる交渉を伝えている。

このようなイギリスによるロシアへの抗議、徳川政権とロシア領事の交渉によって、8月15日にボサドニック号は対馬を退去し、25日にロシア側の全ての軍艦が退去したことで、事件は



終結した。ボサドニック号の退去について、「新聞」では、「ロシヤ船対州退帆之義先達得貴意候義も有之候処、此度駈といたし候書付一見候てハ、八月廿五日ニ御座候」<sup>40)</sup>と記している。「駈といたし候書付」が具体的に何を指し、誰から入手したものであるかは記されていないが、ロシア軍艦の退去を正確に伝えている。更に、事件終結後の「新聞」には、退去後のロシア軍艦の動向について、朝鮮へ向かったと記されており<sup>41)</sup>、鈴木が事件の終結後のロシア軍艦の動向にも気を配っていたことが推察され、鈴木たちが、事件が収束に至るまで大きな関心事を寄せ続けていたことが理解できるだろう。

## おわりに

水戸から遠く離れた対馬で発生したボサドニック号事件は、水戸藩士鈴木大の情報探索活動においても、大きな関心事として捉えられた。事件発生前後から終結に至るまで、鈴木は水戸にいた豊田天功に、情報を送り続けており、その探索活動において、鈴木は、外交現場で活躍していた通詞や、他藩の藩士とのネットワークを構築・利用し、事件発生前後から、様々な情報を獲得していたと考えられる。

それによって得られた情報は、対馬藩政の動向や、藩内で生じている紛争よりも、老中や現地に派遣された外国奉行、つまりは徳川政権の代表的性格を帯びた者と、西洋諸国の会談内容の詳細を伝えるものが多く、探索活動においても、それらの情報を獲得するために鈴木は奔走していたと考えられる。その中で、鈴木が特に重点を置いて探索活動を行っていたと考えられるのが、事件を終結に向かわせる転機ともなった、7月10日に行われた安藤とオールコック、ホープによる秘密会談、つまりはイギリスによる事件への介入であった。8月14日の会談についても、情報に訂正があったものの、はじめ対馬租借をロシアに内密に約束したことで、ロシアの「暴挙」を許す結果を招き、それをイギリスから詰問され、両者の板挟みに遭うという、外交上の失策を犯し、対馬を危機に晒したと噂された、老中安藤信正の外交政策を、鈴木や天功は批判的に捉えていた。また、彼らが収集していた情報をみると、徳川政権の中で、誰がロシアに対して対馬租借を許可したのかという、ボサドニック号事件の原因をつくったともいえる人物を探ることに特に力を注いでいたと考えられる。

今回取り上げたボサドニック号事件に関する鈴木の情報探索活動では、現地対馬の様相よりも、西洋諸国と、徳川政権の外交交渉に関する情報が多い傾向が読み取れる。これは、単に情報活動の拠点が江戸であり、現地の情報が鈴木の下に伝達されにくかったという地理的な問題が原因として考えられる。だが、彼らが、ペリー来航以前から蘭学事業を積極的に展開し、西洋諸国に対する強い関心を抱いていたことを考えると、西洋諸国がどのような思惑や理論をもって、徳川政権や対馬藩と交渉を展開していたのか。その交渉に際して、徳川政権の代表者たちは、どのように返答していたのか、という点に焦点を当てて、鈴木は探索活動を行っていたと考えられる。そして、鈴木や天功ら「鎮派」は、直接的な暴力や破壊活動によって己の主張を訴える「激派」とは異なり、今回考察したような「入念」な探索活動によって、リアルタイムで現場ではどのような外交が行われているのかといった「正確」な情報や知識を吸収することで、それらに対応した政治理論を形成していき、その時々状況に合わせた「慎重」かつ「冷静」

な判断を下して、活動していった集団と評価できるのではないだろうか。

## 注

- 1) ポサドニック号事件を扱った研究は、瀬津正志「文久元年露艦ポサドニックの対馬占拠に就いて」(『法と経済』2, 1934・横山伊徳編『幕末維新と外交』幕末維新論集⑦(吉川弘文館, 2001)に再録), 日野清三郎著・長正統編『幕末における対馬と英露』(東京大学出版会, 1968), 亀掛川博正「外交官としての小栗忠順 ―一八六一年, 露艦「ポサドニック」号対滞泊事件をめぐる―」(『政治経済史学』277, 1989), 井上勝生『開国と幕末変革』日本の歴史18(講談社, 2002), 保谷徹「オールコックは対馬占領を言わなかったか」(『歴史学研究』796, 2004), 麓慎一「ポサドニック号事件について ―ロシア海軍文書館所蔵 Φ 410 O2 頁 2385 を手掛かりに」(『東京大学史料編纂所研究紀要』15, 2005), 伊藤一哉『ロシア人の見た幕末日本』(吉川弘文館, 2009)などが挙げられる。
- 2) 「新聞」に関する研究は、奈良勝司 a「幕末情報の編集と廻覧 ―豊田天功編「国事記」「新聞」を素材に一」(明治維新史学会編『明治維新と史料学』, 吉川弘文館 2010), 同 b「幕末の情報活動と水戸「鎮派」ネットワーク ―鈴木大を中心に―」(『茨城県史研究』94, 2010)を参照。
- 3) 『鈴木大日記』(内閣文庫所蔵史籍叢刊第11巻, 汲古書院, 1981)以下, 『日記』と表記する。
- 4) 会沢が晩年に著した「時務策」などが挙げられる。『水戸学』日本思想体系53(岩波書店, 1973), 504～506頁参照。
- 5) 鈴木暎一『水戸藩学問・教育史の研究』(吉川弘文館, 1987), 193～203頁参照。
- 6) 本誌吉田論文を参照。
- 7) 前掲日野・長書, 3～14頁。
- 8) 同前, 19～26頁。
- 9) 同前, 27～30頁。
- 10) 前掲伊藤書, 156～163頁。
- 11) 『日記』文久元年二月廿八日条, 288～289頁。
- 12) 同前, 文久元年三月十五日条, 307～308頁。
- 13) 同前, 文久元年四月十五日条, 336頁。
- 14) 玉虫の略歴については, 日本史籍協会編『官武通紀』(東京大学出版会, 1976復刻)543～555頁参照。
- 15) 同前。
- 16) 日本史籍協会編『波山記事』(東京大学出版会, 1973復刻)
- 17) 前掲奈良 b 論文, 20～26頁。特に奈良氏は, 鈴木と, 全国各地から集った昌平饗書生寮の書生との関係に注目し, 分析を行っている。
- 18) 前掲日野・長書, 102～104頁。「第一次大船越瀬戸の事変」とも称される。
- 19) 同前, 105～106頁。「第二次大船越瀬戸の事変」とも称される。
- 20) 『日記』文久元年五月廿八日条, 358～359頁。
- 21) 同前, 文久元年六月十二日条, 369頁。
- 22) (文久元年)七月二日届鈴木保之進聞込書「辛酉新聞」(東京都多摩市高橋清賀子家文書 豊田天功・小太郎関係文書)266, 茨城県立歴史館寄託)。
- 23) 『日記』文久元年五月廿五日条, 356頁。
- 24) 前掲日野・長書, 191～200頁。
- 25) 『水戸藩史料』下編全(吉川弘文館, 1970), 85～86頁。
- 26) 『日記』文久元年四月廿七日条, 342頁。
- 27) 第一次東禅寺事件の詳細は, 水戸市史編さん委員会編『水戸市史』中巻5(水戸市, 1990), 29～34頁, 宮永孝『幕末異人殺傷録』(角川書店, 1996), 103～127頁を参照。

- 28) 前掲亀掛川論文, 24 頁, 前掲伊藤書, 182 ~ 190 頁など。
- 29) 『日記』文久元年七月十二日条, 389 ~ 390 頁。
- 30) (文久元年) 七月廿一着鈴保聞込書「辛酉新聞」266。
- 31) (文久元年) 七月廿六日届鈴保聞込書「辛酉新聞」266。
- 32) 『日記』文久元年七月廿一日条, 395 頁。
- 33) 同前, 文久元年七月廿二日条, 395 ~ 396 頁。
- 34) 同前, 文久元年八月十八日条, 412 頁。
- 35) 同前, 文久元年八月廿七日条, 423 頁。
- 36) (文久元年) 九月二日七ツ時届鈴木安之進聞込書「辛酉新聞」266。
- 37) (文久元年) 九月廿一日届鈴安聞込書「辛酉新聞」267。
- 38) (文久元年) 九月十八日届同前聞込書「辛酉新聞」266。
- 39) (文久元年) 九月廿七日着鈴安聞込書「辛酉新聞」267。
- 40) (文久元年) 十月廿二日届鈴安聞込書「辛酉新聞」267。
- 41) (文久元年) 十二月三日届鈴安聞込書「辛酉新聞」267。

